

## 筑前ちんちく堀ものがたり

序に代えて

平成から令和に変わろうとする今、素人物書きの時代小説をまとめてみた、出版を思い立ちました。思えば、嵐寛十郎主演の「鞍馬天狗」に憧れ、吉川英治の「宮本武蔵」に限りない感動を覚えて育った世代です。中学生にもなつて竹の棒を振り回しチャンバラごっこをしていました。空気銃にネズミモチの実を詰めて撃ち合い、顔に当たつて紫色の入れ墨ができた悪そう（悪方キ）でした。

三十年ほど前、岩田屋コミュニティ・カレッジの小説教室に通つて芥川賞候補作家の北川晃二先生のご指導を受けたのがついこの間のようです。二年後に先生が亡くなり、十年ほどブランクがありました。したが、北川先生の後を継がれた深野治先生に再指導を受け、小説のものまねを再出発しました。先生から、「足下の黒田藩の資料調べからはじめ、藩から禄をもらえるようになったら時代小説は書けますよ」

そう言われて、現在住んでいる福岡市中央区地行地区のことを調べているうちに、足軽さんの関屋孫六や春吉の軽輩、池谷新之助たちと知り合いました。彼らの話を聞いているうちに「ほくろ」や「質札」を作品にすることができました。二作とも季刊「九州文学」に投稿して掲載していただきました。

平成三十一年二月二十三日に九州文学の選考委員会から電話が入り、「ほくろ」が平成三十年度の年度最優秀作品賞を受賞したことを告げられました。深野先生から、第一回の受賞者は北川晃二先生で、昭和二十二年第一回九州小説賞「逃亡」で火野葦平の推薦で、当時の「九州文学」から賞を受けられたと承り、なんとも言えない喜びと感動を受けました。株式会社ギャラクシー様のご協力を得て、二作品を出版することができました。感謝申し上げます。敬具

平成三十一年四月七日（七十八歳最後の日・春雷駆け回る夜に記す）

箱島 八郎

## 「筑前ちんちく堀ものがたり」に寄せて

2019年7月1日 深野 治

雑誌「九州文学」（二〇一九冬、四四号）に掲載された箱寫八郎さん「ほくろ」が、平成三十年年度「九州文学」最優秀作品に選ばれたと聞いたとき、お祝いの気持ちに一言添えた。

「おめでとうございます。その賞の第一回受賞者は北川晃二さんですよ。あの『逃亡』です」

自分が言おうとしていることがすぐには伝わらないかもしれないと焦りながらも、口にはせずにはおれなかった。それは、喜びとかさなつて二重三重の思いが衝きあげてきたからだ。

アイ&カルチャ天神の文章講座に箱寫さんが見えるようになって「以前に北川晃二先生に原稿用紙の書き方から教わりました」と自己紹介された。北川晃二さんは、戦後、いち早く創刊された文芸誌「午前」に拠つて福岡の文学活動をリードした作家であり、私も公私ともにたいへんお世話になつた方である。

北川さんのデビュー作「逃亡」は、行き詰まつた日中戦争の断層を鋭く伐り出した作品で火野葦平の激賞するところとなり、戦後の第三期「九州文学」主宰で創設されたばかりの昭和二十一年度「九州小説賞」を受賞した。

第七期「九州文學」通卷五六七号に掲載された箱寫八郎「ほくろ」の平成三十年度最優秀賞受賞をさかのぼると、七十二年前の昭和二十一年度九州小説賞・北川晃二「逃亡」受賞につながるわけで「師弟受賞のお祝いですね」と、私は喜んだのであった。

箱寫さんが、創作に手を染めるようになったきつかけなど、くわしいことは伺っていない。修猷館高・早大で鍛えた講道館柔道五段に黒田藩伝柳生新陰流居合術八段、商社勤務後のプラスチック加工会社の起業を経て、建築設計事務所の経営、四柱推命学に現代家相研究家など多彩多忙の活動で休む暇もなからうにと私などは思ってしまうのだが、ご本人はいつも悠悠然然。「九州文學」同人に加入した当初も、たしか俳句の投稿からだった。

そうこうしているうちに、北九州市自分史文学賞に応募した「父のソフト帽」で大賞受賞、共作で戦国武将・田中吉政の評伝、福岡藩家老の黒田播磨日記の古文書解説に参加、そして「九州文學」への小説寄稿などと神出鬼没の活躍である。今回は「九州文學」に寄せた創作「質札」（黒田藩駒曳き地蔵異聞「改題」と「ほくろ」の二編を「ちんちく堀ものがたり」としての上梓となった。

思えば、北川晃二さんも多面多忙の人であった。それでいて日常の举措にそれをあらわさず倦むことなく著述にいそしむ作家であった。その門に学んだ箱寫八郎さんが、新境地をひらく一巻を世に問うことに泉下で温雅の微笑を浮かべて祝っていられるに違いない。